昭和63年度放送利用の大学公開講座番組制作報告

井出　定利*

1．各地のスクーリングから

今年度は各地のスクーリングに出席させていただくかたわら、会場の受講生（2人）に対面インタビューして私なりのアンケート調査を試みた。このインタビュー調査の目的は、放送による大学公開講座という番組の影響が、数量的に出せるような質問事項を見出せないか―例えば放送という手段を用いる教育の場であるから、数字上には出てこない“イメージ（もしくはメディア）と教育”というようなことが捉えられるデータ、をとるための質問事項を見つけ出したい。そうすればセンターの行っている共通アンケートの質問項目に加えていただくことによって、メディアの特性や制作上に関するもう一つのデータがとれるのではないか。もう一つは、フリートーキングによって視聴並びに制作上の参考意見が収集できれば―、ということであった。

従って調査上の厳密さは量的質的にも計らず、人数は総数でラジオ4地区8人、テレビは6地区12名であったが、ご参考までにその結果を書いてみたい。年齢、性別、職業、視聴の動機など、これだけの少人数でも多様であったが、主に聞いたことは次の3点であった。(1)視聴は放送か録音(画)か、テープ又はVTRで視聴する時はスルーか、止めながらか、(2)テキストと放送はどちらが先か、(3)最も印象に残ったところをどこでもいいから1ツあげて下さい。

(1)については、ラジオでは、放送で→3人、録音で→1人、放送とテープ半々位→2人、テレビは、VTRで→8人、放送で→3人、全部再視聴センターで→1人、スルーかどうかについては、録音（3人）録画（8人）した11名のうち2人を除いて9名の者が全部スルーで見ると答えている。放送前にテキストを読んでるから、わからない所や複雑で細かい図表などはテキストで確認できるから、時間が惜しいから、などの理由であったが、テキストを持たない人で録音録画している人達はどう視聴するのであろうか。いずれにせよテレビの場合、複雑な図表なども1回だけで直感的にわかるような工夫をする、という努力は避けるわけには行かないようである。尚、スルーでは見ないという前記2人（テレビ）のうち、1人は先生の顔ばかりの時はとばして見ることあり、もう1人は逆にまきもどしながら見るので、1本が1時間半もかかる時がある、という答であった。

(2)に関しては、テキストを先に見る、がラジオ5人、テレビはテキストを先に→5人、放送のあとで→5人、ケースバイケース2人、という結果であった。理由は、テキストを先にする

*　民間放送教育協会プロデューサー

→テキストの方が先に出るから、予習として先に読む、先に読んでおくと専門用語などがわかる、読んでおくと安心できる。あとで読むという人は、テキストだけでは途中で挫折しやすい(放送を視聴したあとの方が、テキストを読むことに集中できる)、テキストを復習に位置ずけ、等々であった。

予想では放送の方が先ではなかろうか—何故ならメディアの性質から、放送でイメージや全体像（定性的な捉え方？）を作り、テキストで定量的な理解をするのがベターなのではないかと考えたからである。つまりこの質問をした背景は、もし放送をテキストよりも先にするという人が圧倒的ならば、番組づくりも、よく言われるように放送を動機づけ、基礎づくり、と位置づけ、制作も思いきってそのように作る、という方向づけにもなるかと考えたからである。結果は前記のようになり、数字も理由もメディア論的な位置づけからは論じ難く、課題として残されている。尚テキストと放送とを比較した時、放送の方が分かりやすいし面白い、という答が、殆どであった。しかしこれはあくまでもテキストとは着地点の違う、分かりやすさであり、「わかった」ということの質の違いであり面白さであろうと思う。「media is the message」(マクルーハン)とはこういうことではないだろうか。放送メディアの方が大学講座に向いているということではなく、メディアとしての違いをはっきりさせた発言であろうと思う。

(3)については、テレビに関して言えば、当然具体的で動きのある画像が最も印象に残ったシーンとしてあげられて来たわけであるが、その意味づけは大変難しい。その人が何故そこが最も印象に残ったのかは、13回を見た上で分析すれば或いは興味ある問題がひき出せるかと考えたことが、この質問をした背景であるが、この問題の展開は後日にゆずりたい。

ただこの質問に関して、ある実験を見せる時に、先生がまずその理論的な内容なり前提条件なりを図表や数字を使って話した後で出て来たが、あれは実験のシーンを前に出して、その後理論的なことを話してもらった方が、テレビの場合実験の映像が印象に残っているので理解しやすいのではないかという応答があった。その人の指摘した所を早速テキストで確かめてみると、成程テキストの同じ個処では（やや長い）理論が先にあって実験が後になっている。テレビは何故その実験をアタマで出して進めて行ってはいけないのかという疑問を出して来たわけであるが、テキストと同じ順序で同じように番組づくりをしていることへの批判であろう。一概にこうした方がいいとは言えないが、放送は教室の授業とは違うのだという認識、時間という絶対的な制約を受けたメディアでのメッセージの質と方法の選択、等を考えれば、これ位の構成努力は当然行われなければならない。テキスト→番組化の間の作業として、放送のためのメディア的再構成の手腕が、一番放送局のスタッフに問われるところである。ある地区のインタビューした人から、テレビ番組に関して、放送とテキストと殆ど同じ流れと内容であり、これならばどちらか一つあれば足りるのではないか、という厳しい発言もあったことも付記しておきます。尚、このインタビューによって所期の“イメージと教育”に関するような調査項目を見つけ出すにはいたらず、私の課題になっている。

2．文部大臣奨励賞受賞番組から

今年度は放送公開講座10周年を記念して放送公開講座コンクールが行われたわけであるが、今年度の番組づくりの具体的なことに関しては、私はこの受賞作品について語れば十分である。

これらについては既にシンポジウムの会場で審査委員代表から発表があったので、重復はさけて私なりの感想を書かせて頂くが、結論的に言えば私が今まで報告書で発表させて頂いた内容を確認すれば足りる、ということになりそうである。

私は放送公開講座に関して今まで次のようなことを発表して来た。

☆演出力よりも構成力か—

(1)講座番組は映像の展性がない。従ってその分メディア的再構成の努力が大変に必要である。

(2)映像化のできないところ言葉（論理）がある。言葉も武器として構成の中に取り込む。

☆放送がテキストを越えるには—

(1)講座番組はテレビ（ラジオ）でできることは少ない。それ故、着地点（到達点）をテキストとは変えてみる。

(2)着地点を変える方法として、“ユリイカ”（ラテン語で「私は見た」の意）が必要。

☆興味の流れをどう作るか—

まず、ウェットな流れを作る。図式的に言えば、感動、発見の喜び、人間くささ、悲しみ、怒りなど、言わば“前頭葉的”な要素で川のような流れ（主調低音）をつくり、そこに講座としての論理的、数理的な情報内容（“側頭葉的”な要素）を舟のように浮かべて行くような番組づくりがいいのでは？

何故なら、放送メディアはウェットな流れがよく似合うから—。

文部大臣奨励賞ラジオ部門

東北大学放送公開講座「中国の詩人たち—陶淵明から毛沢東まで—」

第４回（杜甫—さすらいの詩人—）

企画：東北大学、制作：東北放送

この番組は中国の詩人杜甫を芭蕉との関係でとり上げ、構成的には杜甫（詩）を地域文化にぐっとひき寄せて語っていることが大変分かりやすくてよかったと思う。テキストとラジオの構成をざっと比較すると次のようになる。

テキスト、イントロ（李白と杜甫）—「春望」—芭蕉と杜甫—杜甫の生涯—晩年の名作「登高」

ラジオ、李杜にひと言ふれて芭蕉に行く（この辺ひきつけ方がうまい）—芭蕉も杜甫のファン、「奥の細道」朗読—「春望」と講師自身の中国及び敗戦体験—中国語による「春望」朗読—再び芭蕉と杜甫の生涯—「登高」訳。

放送ではテキストより早めに芭蕉をもって来て興味を引きつける工夫がされており、且つ講師の個人的な中国引き揚げと戦争体験も加えることによって、全体として放送に乗りやすいウエットな色調を番組の流れとして、そこに杜甫の詩と解釈を程よく小舟のように浮かべて行くという構造的なものが感じられる。従って大変理解しやすく、すっきりとした印象となっている。また挿入された中国人による中国語の「春望」詩朗読も、一般にテキストの内容に頼りすぎて盛り込み過ぎの印象が強い講座番組では珍しく、駘蕩とした雰囲気を出すことに成功し、「奥の細道」の朗読も耳に心地よい達者なものであった。こういった構成や手法を通して、テキストがなくても、放送は放送で聞いた者が一つの着地点に到達できるということが評価された

ものと思う。

担当講師によるスクーリングも大変盛況であった。

テキストと放送が同じなら、放送は不要ではないか？という前述した声は、ラジオの場合はテレビの場合よりも大きな問題となる。その問題となるところを列記してみると次のようなことが考えられる。

○テキストを持たない大勢の人がいる。だから同じでいい。

○しかしテキストを同じように読んで放送したとして、テキストと同じように内容が伝わるだろうか。

○放送メディアの特性を無視したら、視聴者から支持されないのではないか。

○ねらいは同じにして、方法を変えてみる。しかしこの場合、聴収者の到達点はテキストと同じ到達点に着地できるのだろうか。

○メディアは各々に認識の構造が違うから始めから着地点を“少し”変えてみたらどうだろうか？

私は最後の考え方をとるものであるが、翻ってこの番組にもどって考えると、ラジオ放送で作られた杜甫（詩）と、テキストだけ読んで作られるそれとはどう違うのであろうか。ねらいは同じであるから両者にはそう大きな違いはないであろうが、やはり違うのではないかと思われる。例えば前者から得られる像は“正確な”像であるとすれば、後者は“精確な”像であるかもしれない。或は逆かもしれないし、どちらが本当の像なのであろうか。或は前者が詩や音声による感性的な像であるとすれば、後者からは文字による理知的な像が作られるとでも言えるのであろうか。もしそうであるならばそういう違いは又当然のことであり、そうであるからこそ放送とテキストは各々の結果がない交じり合って、時には足し算となり或は掛け算となって１本の理解の線を作って行くのではあるまいか。いずれにせよテキストはテキストによる１本の線、放送は放送によるもう１本の線づくりができるのであり、この“もう１本の”線づくりの努力が問われるところではあるまいか。

文部大臣奨励賞テレビ部門

新潟大学放送公開講座「脳の発生とその障害―その巧みなしくみを求めて―」

第５回（脳浮腫と頭蓋内圧亢進―死や脳死に誘うもの―）

企画：新潟大学　制作：新潟放送

この番組に対する反響

その１．「先生、我々にもどうしてああいう風に授業をしてくれないのですか」と、学生が出演主任講師の生田教授に言ったという。

その２．スクーリング終了後、テキストに生田先生のサインを貰おうと会場で受講生の長い列ができた。（'89、１月22日）

その３．「生田先生は、私は時々脳を拝みたくなる。それほど素晴しいものだと話してくれた。感動した。」スクーリング会場でインタビューしたひとり。

番組に対する評価はこのような声や風景に定まっていると思われるが、私なりの意見も以下に書いてみたい。

先ずテレビ的な再構成という点に関して—

番組づくりに支払われた努力や熱意は大学や制作局の担当者が書かれた報告書にも表われているが、その中で大沢ディレクターがこう書いている。「……講師の第1稿をディレクターが自分なりに分かり易く書き換えて第2稿をつくったり、講師の考えている講義内容を実際に話してもらい、それをディレクターが録音、シナリオ化することもあった。打合わせは深夜におよぶことも度々だったが、講師の先生方は素人の私たちを相手にねばり強く応じて下さった。……」

このような努力の結果が、再構成ということでもいい結果となって表われていると思う。このメディア的な再構成ということは、放送公開講座番組に一般的に共通して感じられる弱い部分であるが、それがどのように克服されているのだろうか。

テキストの構成、前がき(この章の到達点)—①頭蓋内圧亢進について—Ⅱ浮腫性病巣内で何がおきているか—①急性期アストロサイトの腫張②血管からの浮腫液の漏出と貯溜③異常な細胞外間隙に起きること—細胞生物学的現象の再現、例えば胎児脳と同じ現象。

テレビの構成、生田先生オリエンテイション、武田先生—脳梗塞について(二人の先生が立って話すというスタジオ進行も講座番組としては新鮮で、座って話すよりはある種のスピード感もあり、私は好きである。)—生田先生、急性期アストロサイトの腫脹—「間」という文字(何が起きているのか?)—細胞分裂—再び「間—細胞移動」の文字—脳病変の修復、胎児脳と同じメカニズム—信濃川の流れ(それは又20億年の昔からの生命の営みである。)

このように両者の構成的なポイントを並べてみてもその差異がいまいち浮き上がって来ないが、今まで脳浮腫が死に至る一過程とのみ思われていたが、実はその中でマクロファージが働き細胞分裂や移動もあり、浮腫液が養分ともなって胎児脳にみられるような新しい再生のメカニズムがそこでは働いているのだという内容が、45分という時間の中で思いがけない“間”の文字が、発想の転換、発見への期待の小道具として挿入されていたり、信濃川の流れも、あるカタルシスをもたらすような効果的な使われ方をしており、テレビ的な再構成という点で一つの示唆を与えるものであった。特に良かった点はテキストからはそれほど感じられなかった生命への感動のようなものが、テレビは良く伝わって来たということであろう。私はそこにテキストとは違ったテレビとしての着地点(到達点)の良さを感じることができる。

このことは、テレビ的な再構成の手腕ということでもあるが、その構成の基礎となる“ユリイカ”(私は見た)というものを出演者も制作者側も共有した結果ではないかと思われる。番組づくりは制作者がどんなことでもいいから、まずこの“ユリイカ”を持たないと、いくらテキストにのっとって番組づくりをしてみても、視聴者には見えて来ないのではなかろうか。とにかく私はこの番組に、あるものを“見る”ことができるし、挿入された信濃川の流れにも何ごとかを見ることができた。

この場合の“見る”というのは、別の言葉でいえば直感の内容であり、日常よく使う、イメージが来た—来ない、という時のイメージのようなものであるか、しかし“見る”ことはそうやさしいことではない。特に大学講座の番組は、制作スタッフがどう努力しても理解を越える専門の分野が多い。当然といえば当然であるが、その場合には講師の先生におんぶして、先生の“見た”ものを引き出すという方法もある。文部大臣奨励賞を得た当作品は、この方法に式功し

たとも言えるのではあるまいか。

では何故そんなに“見る”ことにこだわるのか。

その一つは、見せるのか見てもらうのか、わからせるのかわかってもらうのか、という論点が提出されている(昭和63年度実施報告、中国放送、秋田憲吾氏)。私は今まで講座番組をこういう分け方で考えたことはなかったが、敢て言えば秋田氏も言うように、見ていただく、わかってもらうということであろう。しかしもっと大事なことは、やはり局制作者が何かを見なければ、見る努力をしなければ視聴者も見ることができない、わかってもらうことができない、ことであろう。

その二は、テレビの前にいる視聴者をinvolveするものは、「発見への好奇心」であるが、教育番組のように“理解”(する、させる)ということが加わってくると、途端にその内容は、時間を絶対的な条件としたテレビメディアにはのりにくくなる、という大変示唆に富んだ論文がある(MME研究ノート、'86No26野沢卓弐氏「ビデオテープレコーダーの調査とその考察」)。しかし、かといって私どもは“理解”ということを放棄して番組づくりをするわけにはいかない。その場合、理解という難しい条件が加わったにしても、局の制作者側に“見た”ものがあれば講座番組でもテレビにのせやすくなるのではないかと思われるからである。

興味の流れ—ウェットな主調低音もいい—。

ラジオもテレビもウエットなものがよく似合う。この番組について言えば、生田先生が、脳のしくみについて話すのではなく、脳のしくみが“いかに素晴しいか”—“拝みたくなるような存在としての脳の有り様を話す”ことを主調低音としておいたことが式功したのではあるまいか。そういうウエットな底流を作り、そこに医学的な講座としての知識なり情報を載せて行ったことがよかったのではあるまいか。

それともう一つは言葉も表現の武器として大事に使っておられるところもよかったように思う。即ち、講座番組はいわゆる画(え)にならないところが多い。しかし画にならないところには論理(言葉)がある。これも番組を面白くする有力な武器である。生田先生の話される言葉は適当に文学性(或は哲学性)を帯びていて我々をウエットな流れにのせるに十分であったように思う。